

惜春の力クテル

身近伊代

中の身だつた。

当時、お濠端にあるパレスホテルのバーには、その昔、初代のチーフバーテンダーでミスター・マティニーと言われた伝説のバーテンダーから直接教えを受けた何人かのバーテンダーがいた。そのうちのひとりで、自分の店を開いたY氏というバーマンのもとに弟子入りしたKは日々技術、知識を磨いていた。偶の休日はKにとつては唯一の息抜きの日だつた。

ある日、映画が好きだつたKは、いつもよく行く映画館に入つた。日中から桜見物客で周辺は賑わつていた。ようやく夜の帳が降りてきて、昏闇の騒音は随分少なくなつた。

客が来るにはまだ時間があるな、と思いながらバー・テンダーのKは氷の塊を一定の大きさに削る作業の手を休め、アイスピックを下に置くと、肩の凝りをほぐそうと首を廻し始めた。

そのとき、ドアが開いた。おや、随分早い客だなと、Kは眼を上げると客を見やつた。

「いらっしゃ……」と言いかけて、Kは後の言葉を飲み込んだ。

女の表情は溢れるような懐旧の情感に満ちていた。ふたりはしばし無言のまま互いに見詰め合つた。

☆

女と知り合つたとき、Kは一流のバーテンダーを夢見て修業

☆

その日からKはその女が忘れられない存在になつた。それからというもの、折につけては女の面影が目蓋に浮かぶようになつた。

二ヶ月ほど過ぎた頃、Kが働く店に偶然そのときの女が友達

らしい連れとやつてきた。

Kは周りに音が聞こえたのではないかと思つ位心臓がドキンとした。無論、女はKのことは覚えていなかつた。

Kは女性たちからなにか話しかけられても、しどろもどろになり勝ちだつた。

脇でY氏が、何気なくKを見ては、首を傾げていたが、若いKが美しい女性を目の当たりにしては当然の反応なのだと思い至り、横を向いて苦笑をかみ殺していた。

穢やかななかにも粹な人柄がにじみ出でているオーナーのY氏

と眞面目な若いバーテンダーのKのふたりに好印象を持つたのか、女はそれからよく店に来るようになつた。

Kも次第に彼女たちとリラックスして会話をできるようになつていつた

だが、Kの密かな想いはいつまでも隠し通せるものではなく、女のほうもいつとはなく、Kの想いに気が付くようになつていた。

「ね、Kさん、わたし、来月誕生日なの」

「そうですか、九月何日なのですか？」

「九日なの」

「おや、重陽の節句ですね」

「あら、よくご存知ね」

「いえ、偶々知つていただけですよ」

「会社の人たちが、お祝いしてくださるらしいの。帰りに寄るうかな」

「お待ちしています」

Kの胸に小さな灯が点つた（そうだ彼女に捧げるオリジナルのカクテルを創ろう）

☆



「わあ、綺麗な色」

女は自分の前にある艶やかな紅色のカクテルにしばし眼を奪われた。

「なんていうカクテルですか？」

「もともと『宵桜』というカクテルがあるのですが、ベースのジンをライトラムにしてレシピを少し変え、ネーミングを『宵桜』にしました。

そつとカクテルを口に含んだ女は眼を見張った。

「美味しい……」

「有難うございます。これはオリジナルなので、貴女へのお祝いに贈ります。そして、貴女だけのカクテルにしましょう」

「まあ、ほんと？ 有難う。嬉しいわ」

女は輝くような笑顔でKを見た。

☆

だが、結局、Kはバーという劇場から一歩も踏み出すことなく終わった。

女は翌年会社の同僚と結婚した。そして、その後は店に現れることはなかった。

いま、何十年ぶりかでKは女とカウンター越しに再会したのだ。

「先日のかたがお嬢さんだとすぐ判りましたよ」

「そう、私も娘からカクテルの名前を聞いてすぐ判ったのよ、あつ、Kさんだつて。あの日、私の義兄が娘を連れてここに来たのですつてね。偶然とはいえ、Kさんのお店だつたとは。世の中つてほんとに狭いわね」

「私もビックリしました、貴女にそつくりなので」
「Kさん、娘に出てくださつた『宵桜』はわたしへのメッセージだつたのね？」

「…………」

「どうどう、自分のお店を持つたのね。とてもシックな感じのいいお店ね」

女はさらりと話題を変えた。

「有難うございます」

「二十五、六年になるかしらね」

「早いものです、月日の経つのは」

女は感慨深げに肯いた。

☆

閉店後、Kは時間の経つのも忘れてカウンターに立ち尽くしていった。

夜は深く、その濃さを増していた。